

寛永年間植栽「諏訪森アカマツ林」の保全を考える

「富士山」世界文化遺産登録へ向けたシンポジウム



11月10日（木）富士河口湖町の山梨県立富士ビジターセンターで、寛永年間に植栽されたアカマツ林の保全を考えるシンポジウムを開催しました。

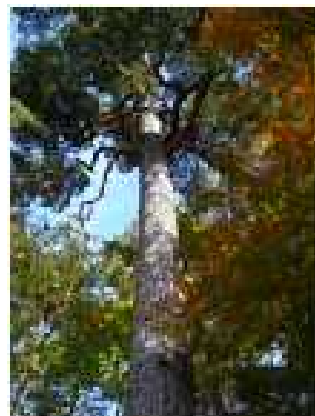
富士山の積雪が溶けて発生する濁流「雪代（ゆきしろ）」を防ぐため、当時、谷村城主である秋元富朝が、信州から取り寄せたアカマツ3万本を植栽したとされる諏訪森アカマツ林。その一部が諏訪森国有林であり、現在、そのほとんどを保護林に設定し保全してきたところですが、今後の取扱いを地域と一体となり考えていくことが求められていました。

今回のシンポジウムでは、雪代発生メカニズム、高齢アカマツ林の成長特性、高標高地アカマツ林の保全方法など、それぞれの分野の専門家より話題提供を受け、地域の関係者との意見交換を行いました。

諏訪森国有林は、「富士山」世界文化遺産の構成資産である吉田口登山道の一部でもあることから、地域と連携しながら保全対策を進めること等、シンポジウムで出された意見を反映させ、民有林も活用できる管理指針を作成することが確認されました。



アカマツ林の保全について意見交換が行われた



諏訪森アカマツ林